

日本人選手とハンガリー人選手の全豪オープンテニス

ーテニス界は新しい時代の過渡期へ

フェデラー優勝の意味

全豪オープンはフェデラーの二連覇、通算 6 度目の全豪優勝で終わった。フェデラーはオールラウンドの選手だと言われるが、最大の武器はサービスである。球速は 190 – 200km/h 前後ととくに早いわけではないが、非常に制球が効いているので、不安定な剛球サーバーより、はるかにサービスポイントが多い。安定したサービスで 3 球あるいは 5 球勝負で、早いゲーム展開に持ち込めるのが、フェデラーの最大の武器である。昔はサーブ・アンド・ヴォレーを軸にゲームを組み立てる選手は多かったが、今ではこういうタイプの選手は希少だ。だから、ストローク主体のチョン選手は手も足も出なかった。

実際、フェデラーのサービス・エース数は歴代 2 位で、サービス格付け（新しい数値指標で、ファーストサービスの確率、ファーストサービスのポイント確率、セカンドサービスのポイント確率、サービスゲーム取得率を加算したものに、さらに 1 試合当たりのサービス・エース数を加え、1 試合当たりのダブルフォールト数を差し引いた数値）は、210cm 前後の長身イスナー、カルロヴィッチという剛球サーバーに次いで 3 位である。

1 年前の全豪オープン 4 回戦、錦織は怪我からの再起戦を戦うフェデラーと対戦した。序盤、錦織がフェデラーを圧倒し、フェデラー時代の終わりを告げる戦いになると思った。ところが、錦織が第 1 セットを取り切るのに手間取っている間に、フェデラーが息を吹き返した。最終セットまでもつれたが、最後はフェデラーがきっちりと勝利を収め、ナダルとの決勝戦も押しきり、久しぶりのグランドスラム大会優勝となった。フェデラーにとって、再起の自信を付ける大会になり、錦織はフェデラーの壁を打ち破ることができなかった。フェデラー自身も、1 年前の対錦織戦がそれ以後の復活のエポックメイキングだったと言っている。

その後、フェデラーは ATP マスターズ 2 大会を勝ち、ウィンブルドンでも優勝し、完全復活を印象づけた。他方、錦織は南米大会で誤算続きの試合で調子を狂わせ、夏には手首の腱の部分断裂で長期の休養を強いられた。

「さすがにフェデラーは東京五輪にはいないと思う」と語った錦織だが、今の調子でいけば、東京五輪がフェデラーの最後の花道になる可能性が高い。最後に残された勲章が、五輪金メダルだけだからだ。

さて、錦織不在の 2018 年全豪オープンだったが、日本選手の健闘が目立った大会だった。

ハンガリー選手はバボシュ・ティメアがダブルス・タイトルを取るなど、日本選手以上の活躍だった。

日本の男子選手

男子は杉田・西岡選手はともに2回戦で敗れたが、杉田選手の1回戦の相手は、昨年 ATP (男子プロテニス) の最終戦 (年間チャンピオンシップ) で準優勝し、世界ランク9位にランクインしたソックである。いきなりトップテン (第8シード) 選手との顔合わせは不運だが、これを見事な勝利で飾った。ソックの調子が今一つだったとはいえ、杉田選手が自力を見せた試合である。

2回戦は211cmの長身からの強烈なサービスで、生涯サービス・エース数の世界記録 (全豪前の統計で、630試合12,302本) をもつカルロヴィッチ選手。カルロヴィッチのサービスが好調な時には、トップ選手でもセットを取るのに苦労する。杉田選手は5セットで50本以上のサービス・エースを決められたが、これはラケットにかすりもしなかったサービスの数で、ラケットに触れたがはじかれてしまったサービスは含まれていない。それを含めると、カルロヴィッチ選手の獲得ポイントの8割はサービスだけで決まっている。30cm以上も身長が違う相手に4時間半の熱闘を繰り広げたが、これだけの時間を経過してもカルロヴィッチ選手のサービスが崩れず、最後は杉田選手の力が尽きた。ここは杉田選手の健闘を称えたい。

錦織選手と同じフロリダの練習拠点にも所属している西岡選手は小柄 (170cm) ながら、昨年ブレイクし、シングルスランキング58位まで上げたが、ソック選手との試合中に左膝の十字靭帯断裂の重傷を負い、世界ランクは168位まで下がった。長期のリハビリを克服し、この全豪オープンが再起戦だった。1回戦の相手は第27シードの試合巧者コールシュラーバー。苦戦が予想されたが、事前の予想を覆し、最終セットまでもつれる展開ながら、見事に勝利した。2回戦で敗れたとは言え、まだ若い22歳だから、今後に期待が持てる結果である。

車椅子テニスは日本が得意の分野である。女子は上地選手がダブルスで優勝したが、シングルの二連覇はならなかった。男子は肘の手術から復帰した国枝慎吾選手が21度目のグランドスラム大会優勝を記録した。決勝戦の対ウデ戦は最終セット2-5の劣勢から3度のマッチポイントを切り抜け、7-6と逆転しての優勝だった。球が二度バウンドして打ってもOKというルール以外は、健常者テニスルールと変わらない。車椅子を操作しながらのヒッティングはかなりの体力を必要とする。国枝選手の勝負強さは健在である。

フェデラーのグランドスラム大会優勝20回に匹敵する活躍だが、車椅子のグランドスラム大会への出場者は8人のみだから、3回勝てば優勝する。若手が台頭するなか、中堅世代

に入った国枝選手が意地を見せた試合だった。ただ、観客が 200 名ほどでスタンドにはぼつりぼつりと人がいる程度だったが、非常に熱のこもった試合だった。テレビ中継は高々男女ダブルスの試合までで、車椅子の中継が行われることはほとんどないが、初めて車椅子テニスのゲームを堪能させてもらった。ジュースなしの簡略化されたルールで戦う混合ダブルスの決勝よりも、はるかに緊張感のあるゲームだった。

全豪後のデ杯ワールドグループ 1 回戦

全豪の後は、2 月第 1 週週末に、日本は盛岡でデ杯ワールドリーグ 1 回戦をイタリアと戦う。西岡選手が全豪 2 回戦でイタリアのベテラン選手であるセッピに 3 セットのストレートで敗れたのが気になるところだが、今回、西岡選手はデ杯チームに加わっていない。イタリア No.1 のフォニーニの調子が良いので、セッピとフォニーニの組合せで来られると、杉田 1 人の日本は厳しい戦いを強いられる。ただ、錦織選手が出ない戦いに、イタリアがセッピとフォニーニをぶつけてくるのか、あるいは格下の選手を当ててくるかで、勝負の行方は大きく異なる。全豪で勝ち進んだイタリアの両選手は控えに回る可能性もある。ここは杉田の奮闘と、ホームアドヴァンテージを期待したい。日本に初めて来る選手は東回りの時差の影響を知らない。2014 年の楽天オープン初戦で、伊藤竜馬が第 1 シードのワ布林カを破ったが、明らかに時差の影響でワ布林カは戦意を失っていた。これが欧州から遠い日本のアドヴァンテージである。時差の調整には少なくとも 1 週間が必要だが、デ杯 1 回戦のために、プロ選手がそれだけの余裕を持って日本へ来ることはない。

西岡選手は全豪シングルス 2 回戦で敗れた後、ハンガリーのフチョヴィッチ選手と組んでダブルスに登場した。相手は元世界 1 位のブライアン兄弟で、最終セットは簡単に取られてしまったが、第 2 セットまで拮抗したゲームを展開した。昨年秋、ハンガリーはフチョヴィッチの大活躍で、ワールドグループ進出をかけたプレイオフでロシアを破り、1994 年以来、2 度目の世界グループに返り咲いた。全豪オープン前に 80 位までランクを上げたフチョヴィッチは遅咲きの 25 歳、ニレージハーザ出身のテニス選手である。フチョヴィッチにとって、全豪での西岡とのダブルス戦は、2 月のデ杯の戦いを想定しての練習マッチだった。全豪後のランキングで、フチョヴィッチは 63 位にランクインした。

デ杯でフルチョヴィッチはシングルスもダブルスもフルで戦う必要があるが、日本は日本国籍を選択したマクラクマンと内山とのコンビが良く、マクラクマンは全豪オープンで、ドイツのシュトルフ選手と組んでベストフォアまで進んだから、ダブルスのポイントが期待できる。杉田の 2 勝とダブルスの 1 勝がなければ、日本は 2 回戦へ進めず、負ければ再び秋にプレイオフに臨むことになる。

セレシュ、バボシュ、ホッサー・カティンカ

ハンガリーのフルチョヴィッチ選手は全豪4回戦（ベスト16）まで勝ち進み、フェデラーと対戦した。フルチョヴィッチは安定したストロークが特徴で、188cmの長身からのサーブも悪くない。1984年の全豪でテメシュヴァーリ・アンドレアが4回戦まで進んで以来、ハンガリー選手が全豪大会のシングルスで第2週に進むことはなかった。実に、34年振りである。

テメシュヴァーリが14-15歳の時に、通っていたブダペストのテニスコートで国内試合を何度か見たことがある。両親ともバスケットボールの代表選手で、父親がテニスを教えていた。16歳の時に、フェデレーションカップで日本に来たときに、監督と選手を連れて、銀座の焼き肉屋に繰り出したのを覚えている。その後、1983年には世界7位までランクを上げたが、父親との葛藤があり、怪我で休んでいた時に年配の医師と結婚して、素人の夫が球出しをしていた。1987-89年の2年間の休養を経て、1989年にトーナメントに復帰したが、専属コーチがおらず、コンスタントに成績を残せなかった。

全豪女子のダブルスで、バボシュ・ティメアはフランスのムラデノヴィッチと組んで見事優勝した。1986年にテメシュヴァーリがナヴラティロヴァと組んで全仏に優勝して以来、32年振りである。

ハンガリーのテニス界のレジェンドは、1970年代から80年代にかけて活躍したタローツィ・バラージュ（シングルス・タイトル13勝、ダブルス・タイトル26勝）である。タローツィが1981年に全仏オープンでシングルス・ベスト8に進んでから、男子選手として実に36年振りにフルチョヴィッチがグランドスラム大会ベスト16となった。タローツィは1981年の全日本オープン決勝（田園コロシアム）でアメリカのテルシャーを破って優勝している。当時の日本は九鬼、神和住、坂井といった選手が日本を代表していた。タローツィはクレイコートを得意とする選手で、全仏（1981年）とウィンブルドン（1985年）に、スイスのギュントハルトと組んでダブルスの優勝を飾っている。

2月のデ杯ワールドグループ1回戦で、ハンガリーはベルギーとアウェイで戦う。世界ランク7位ゴファンが主力のベルギーは難敵である。昨秋、ワールドグループ昇格プレイオフでハンガリーがロシアに勝利できた要因の一つは、ホームで球速の遅いクレイコートを選択できたからだ。1995年に、世界ランカーを抱えてやってきたオーストラリアに劇的に勝利したのも、特設した柔らかい赤土コートによるところが大きい。この遅いサーフェイスでストローク戦に持ち込んだハンガリーが、オーストラリアを破るといふ番狂わせを起こした。しかし、今回は室内の球速が速いコートが準備されるだろうから、対ロシア戦のように簡単ではないだろう。

全豪オープン女子のハンガリー人選手はバボシュ 1 人である。シングルス 1 回戦で、世界ランク 8 位のココ・ヴァンダヴェーゲに勝利したが、2 回戦でスペイン選手に敗れて早い敗退となったが、ダブルスでは今年から新たなパートナーであるフランスのムラデノヴィッチと組み、見事優勝した。また、ミックスダブルスでも、決勝に進み、準優勝となった。

ちなみに、1 月に発表イベントがあったハンガリーの 2017 年スポーツ大賞で、男子団体部はデ杯チームが獲得した。女子の個人大賞は 2017 年 WTA 最終戦ダブルス選手権で優勝したバボシュ・ティメアと、競泳のホッサー・カティンカとの争いになった。主催者のサプライズとして、女子個人大賞を授与するゲストにセレシュ・モニカが登場したので、誰もがテニスのバボシュが大賞を獲得と思ったが、ブダペスト水泳世界選手権で 2 個の金メダルをとり、2017 年欧州年間女子スポーツ選手大賞で 2 位に入ったホッサー・カティンカが獲得した。

ちなみに、セレシュ・モニカは現役時代にセルビアを代表していたが、その後アメリカの市民権を取得してアメリカに居住している。ノヴィ・サド（ウーイヴィディーク）出身のハンガリー人である。両親がハンガリー人なので、母語はハンガリー語である。2008 年に正式にテニス界からの引退を表明し、国籍をアメリカからハンガリーへと変更した。

余談になるが、ホッサーのコーチで夫であるアメリカ人のストップは 2017 年コーチ大賞を獲得したが、二人は昨秋から別居中で、表彰会場でホッサーと席を同じくせず、アメリカから呼び寄せた母親とともに授賞式に参加していた。受賞スピーチでは、メモ用紙を見ながら、たどたどしいハンガリー語で、自らの言動がいろいろな人を傷つけたことを謝罪したい旨の心境を語った。ブダペスト世界選手権後の短水路 W 杯の成績（東京大会とそれに続く大会）をめぐる、ホッサーとの間で激しい言い争いがあったと言われている。リオ五輪、ブダペストの世界選手権と、世界の頂点を目指して 5 年間、脇目も振らず、ストップと二人三脚で走り続けてきた二人が、少し離れてこれからの生き方を見つめ直したいということのようだ。スポーツ選手がどのようにモチベーションを維持していくのか、どんな競技であっても難しいものである。

日本の女子テニス選手

大坂なおみ選手は 3 回戦で同世代の実力者バーティ選手に勝ち、4 回戦で世界ランク 1 位のハレブ選手と戦った。ハレブ選手は 3 回戦の対デイヴィス戦で、実に 3 時間 40 分を超える戦いを制しての 4 回戦だった。大坂選手の 3 倍の試合時間をかけた試合で疲労困憊しているかと思ったが、序盤の劣勢を乗り越えると、コート縦横無尽に走り回り、安定したストロークで大坂選手を退けた。ハレブ選手は体が大きい方ではないが、フィジカルが強い。3 回戦までの消極的な戦いが影を潜め、アグレッシブなテニスを展開した。ここぞという時に力

を出すのが、トップ選手である。

これにたいして、序盤のストローク戦で押していた大坂選手は、ボール1つあるいは2つ分の狂いを、最後まで調整できなかった。もともと、ストロークに安定感が欠ける選手だから、改めて課題が見えた試合だった。大坂選手の男子並みのファーストサービスが目されるが、球速が極端に遅くなるセカンドサービスは何度も叩かれた。これも課題として残ったが、グランドスラム大会で初の4回戦（ベスト16）進出は、今後の大きな自信になるだろう。

日本女子は数多くの選手がトーナメントに参加しているが、シングルスは大坂を除いて、ほとんどが本戦前の予選で敗れるか、本戦の初戦で敗れている。日本の女子選手は体が小さく非力で、相手の強いボールを当てて返している場合が多い。現在のパワーテニス時代に、パッシブなプレーでトーナメントを勝ち上がるのは難しい。カウンターアタックができるフィジカルの強さがないと、世界では通用しない。同じアジアの選手でも、ここが中国選手との決定的な違いである。

ハレブ選手の身長は170cmに届かないし、ハレブ選手と4時間近い熱闘を繰り広げたデイヴィス選手は160cmに届かない。だから、体の大きさだけで言えば、日本の女子選手が大きなハンディを背負っているとは言えない。しかし、体力だけでなく、肩や腕の力が圧倒的に不足している。ラケットを当てるだけでなく、振り切ってボールを叩く力がなければ、今の女子テニスの世界で上位に行くことは難しい。

テニス界は世代交代の過渡期へ

男子4回戦でジョコヴィッチ選手をストレートで破った韓国のチョン選手。昨年から新設された若手の最終チャンピオンシップであるネクスト・ジェネレーション大会で優勝した実績が、フロックでなかったことを証明した。次世代プレーヤーのトップを走っているズヴェレフ選手を3回戦で破り、故障明けで体調万全でないとはいえ4回戦まで危なげなく勝ち上がってきたジョコヴィッチを相手に、ストレートでの勝利は見事である。

チョン選手はフィジカルが非常に強い。強靱な下半身は常に安定した態勢を維持し、それがカウンターのフォアハンドストロークに生かされている。とてもラケットが届きそうにもないボールに追いつき、無理な態勢からでもパッシングでエースショットを取ることができる強さが、チョン選手の躍進を支えている。まさに、鉄壁の守備を誇ったジョコヴィッチ並みのディフェンスである。本人も自認するように、ジョコヴィッチ・タイプの選手である。

弱点を言えば、サービスだろう。188cmの上背と強靱な体躯にもかかわらず、意外にサービスが遅い。ほとんどのファーストサービスは180km/hを少し上回る程度である。平均速度は180km/hを下回る。このスピードだと、これから予想されるライバルとの厳しい戦いに苦戦が予想される。これが今後のチョン選手の課題になるだろう。

それにしても、21歳のチョン選手のみならず、生きの良い若い選手がたくさん頭角を現してきた。世界ランク4位20歳のA.ズヴェレフ（ドイツ）を先頭に、18歳のシャポヴァロフ（カナダ）、20歳のルブレフ（ロシア）、21歳のハチャノフ（ロシア）、同じく21歳のメドヴェージェフ（ロシア）、21歳のチョリッチ（クロアチア）が、次世代の世界を狙う選手たちである。

ビッグフォーとこれら若手との狭間の世代が、錦織、チリッチ、ラオニッチ、ディミトロフで、若手の実力者でランク5位のティーム（オーストリア）も24歳になり、若手に追い上げられる中間世代になってしまった。

10年も続いた4強（フェデラー、ナダル、ジョコヴィッチ、マリー、それに加えてワブリнка5強）が圧倒的な支配を続ける希有な時代が去りつつあるなかで、ここから数年、新しい時代を形成する若い選手の激しい先陣争いの過渡期が続く。狭間の世代がこの過渡期の戦いにどう抗していくのかも見所である。

錦織選手のカムバック戦

全豪オープンの第2週に開催されたチャレンジャー大会（ニューポート・ビーチ、カリフォルニア）に、半年のリハビリ期間を終えた錦織選手が参加した。ワイルドカードで出場し第1シードだったが、初戦で敗れてしまった。チャレンジャー大会はいわばプロ選手の2部の大会で、若手選手やランク落の選手がポイントを稼いで、ATPツアー（1部の大会）の出場権を得るためにポイントを稼ぐサーキット大会である。

2部の大会とはいえ、ニューポート・ビーチの大会は賞金額（15万ドル）が高く、優勝ポイントも125ポイントだから、それなりの選手が集まってくる。全豪オープンにも出場していた世界ランク81位で期待の若手のティアフォーや91位のフリッツが第2、第3シードになっているレベルの高い大会である。

錦織の初戦の対戦相手は238位のロシア出身の長身選手ノヴィコフ。2016年に両者はATPツアー（ATP1000カナダ・ロジャーズカップ）のベスト32で対戦しており、その時のゲームカウントが6-4、7-5の錦織の勝利だった。当時のノヴィコフのランキングは150位前後だが、予選を勝ち上がり、本戦でも勝ち進んで錦織と対戦した。怪我のない状態でこのゲーム差だから、故障明けの初戦の相手として簡単でないことは予想された。案の定、強いサーブに手こずり、自らのサービスゲームの維持に苦勞して、フルセットで敗戦となった。チャレンジャー大会に出ている選手は生活がかかっているから、100%の勢いで上位選手に向かってくる。だから、いくらランクが離れていても、フィジカルなフィットネスがないと負けてしまう。同じ大会で、第2シードのティアフォーも初戦で敗退した。

幸い、今週から始まったダラスのサーキット大会1回戦で、再びノヴィコフ選手と対戦することになったが、事前にイスナー選手との練習をこなし、速いサービスへの対応になれ

での参戦だったので、6-3、6-3 のストレートでリヴェンジできた。次第に調子を上げていくことだろう。

錦織がいなくなった後のテニス界は、急激に世代交代の過渡期へ向かって動き出している。新旧のランキング選手が、突き上げてくる若手と対峙する時代が数年続くことになろう。もう一度、錦織が脚光を浴びるところまで、テニスのレベルを上げていけるか。若い選手の突き上げをどう受け止めるか。テニス界は新たな時代を迎える過渡期に入っている。

(2018年1月30日)